

はじめに

「なんでもない」人の視点から映画や小説、社会について考えてみたい。

これがこの本の出発点だ。

街中でしばらく会っていなかった知り合いとばったり出くわす。もしくは、家族の集まりで親戚と顔を合わせる。そんなときに相手から「最近どうしてるの？」と聞かれると、ぼくはつい「いやあ、何もしてないよ」などと答えてしまう。

すると相手は、「え」と困った顔で「何もしてない？」と言ったり、苦笑いを浮かべたりする。ぼくも、相手はただ近況を聞いているだけであり、その質問に対しては、仕事のことでも、家族のことでも適当に返事をすればいいということとは分かっている。相手を困らせたくて「何もしてない」などと言っているわけじゃない。そもそもぼくにしても、実際は日々「何もしてない」なんてことはない。

例えば、最近「した」ことと言えば、

- (実家の) 飼い猫にエサをやる。
- 週1の当番で家族の夕ご飯を作る。
- 中国語の勉強を始めた。
- 昨年から近所の市民農園に通い、野菜を育てるようになった。一緒に畑を耕す、年長のおじさん、おばさんとの会話になごむ。

ざっとこんなところだろうか。挙げればまだ他にもいろいろある。

そう、ほくは実際にはいろいろなことを「している」のである。

しかし、ではなぜ久しぶりに会った相手に「何もしてない」などと言ってしまふのか。というのもそれは、ほくが普段「している」ことが、久々の近況報告の会話で持ち出すには、どこかそぐわれないと感じられるものが多いからだ。

「何してるの？」という質問は、おそらく仕事や景気、もしくは家族のことなど、誰とも共有しやすい話題の範囲で、最近とくに自分が取り組んでいる、力を入れていることは何

か、と聞くフレーズなのだと思う。例えばこの質問への返答として、「いやあ、休日も仕事が多くて大変」とか「子どもが入学式で」とか、「大相撲ばかり見てる」とか言うのであれば、滞りなく会話が続くだろう。仕事、子ども、大相撲なら誰でも知っている話題だし、その中で何に重点が置かれているかが分かるからだ。けれども、ここでぼくが「畑に行き始めた」とか「猫のエサが」などと言い出したら、(もちろん親しい友人なら話を通じるかもしれないが) 久しぶりに会った親戚などは「畑? 猫?」、なんでそんな話題振るの? という反応を返すだろう。

ぼくは、10年ほど前に大学を卒業してから就職をせず、30代のいまに至るまで実家で暮らしている。塾講師をしたり、ウェブなどでちよこちよこ文章を書いたりしてきたが、フルタイムで働いたことはなく、結婚もしていない。

こういう生活を送っていると、久しぶりに会った相手に「これをしている」と一言言うことができる。「何か」がなかなか出てこないのである。

先に挙げたように「何もしてないよ」と答えるほくだって、実際は「何か」を「している」のだけれど、その「何か」はどれも世間で交わされる「何してるの?」という質問への答えとしてはしっくりこない、どこか中途半端な「何か」ばかりなのである。

けれども、この10年ほどを過ごすうちに思ったのは、こうした「何してるの？」という質問への答えとしてはふさわしくない、中途半端な「何か」は、人が生きていく上で案外大事なものなんじゃないか、ということだった。他人に報告するほどでもないが、おそろくほとんどの人たちが無意識に経験している、日々の小さな行為や出来事。それらが人の生活を形作っている側面もあるんじゃないか、と。

市民農園の畑の野菜についていたイモムシ、すぐにエサをくれと要求する飼猫たちの鳴き声、いまひとつうまくできなかった夕食の献立、一日の終わりにベッドへ入り、まぶたの裏に浮かぶのは、大体こうしたその日にあった、どうでもいい「何か」の数々だ。

世間の尺度から見たら「何もしてない」とイコールとみなされてしまう、中途半端な「何か」。そういう無数の「何か」を積み重ね、日々を生きる「なんでもない」人としての自分。普段の生活の中で自分が持っているペースやリズム、嗜好しこう、そういったものを出発点にして、世の中を見つめ直してみると、何が見えてくるのか。

こんな問いが頭の中で浮かぶようになっていた。

「生き残れ」と「何者か」

大学を卒業してから10年間、東京で暮らしてきて、ぼくは年々ある種の息苦しさを覚えるようになった。

ネットでもテレビでもニュースを見ていれば、いまの日本には山ほど問題があることが分かる。政治、経済、少子化、過疎化、原発、差別……。けれども、ぼくが感じる息苦しさとはいさ、そうした大きな話題と関連しながらも、それよりはもっと日常的な部分でさりげなく個人に近づいてくる、ここで生活していると知らず知らずに顔を突き合わす、微妙な問題からやってきている。

いまこの息苦しきの裏にあるものは何かと考えてみる。

ひとつは、この社会で無意識的に発せられている「生き残れ」という言葉だ。ぼくは、この30年間日本で格差社会と呼ばれる状況が広がってくる中で、次第に「他人に勝って生き残れ」という呼びかけが広がり、いまかつてない勢いで浸透してきていると感じる。

ビジネスに関連する文脈で「これからの時代は〇〇をしないと生き残れませんよ」などといったフレーズを耳にすることがあるだろう。文脈にもよるが、ぼくは多くの場合、こ

の言葉とそこに含まれる考え方に強い違和感を持ってきた。「生き残れ」という一語には、いまの社会で人を競争に駆り立て、競争そのものを助長する考え方が潜んでいる。

この言葉がスポーツの試合のような公平な競争の場で使われるなら、それほど問題ではないかもしれない。けれどもいまは、社会の中で有利な立場にいる人であろうと、不利な立場にいる人であろうと、まるで誰にでもあてはまるかのように、「競争の中で何かの能力を身につけ、他人に勝って生き残れ」ということが言われている。ビジネスの場だけでなく、教育や学問の場などでも使われているのを目にしてきた。

「生き残れ」という言葉とそこに含まれる考え方に問題があるのは、フェアであることが保障されていない状況でこの考え方を適用すると、不利な立場にいる人たち、社会的弱者が競争で負けたとき、その「負け」は「自己責任」とされ、一方で競争を生み出す社会や国という「しくみ」の問題は検討されなくなってしまうからだ。さらに、より深刻な問題は、不利な立場にいる人が自分の中に「生き残れ」という主張を保持することで、自ら競争の最中に入っていく、結果的にそのしくみを補強してしまう、悪循環を引き起こす点にある。いまの世の中はたしかに厳しい。生きるために人は何らかの策を練らなければならぬ。けれど、「生き残れ」という風潮は、一見その解答であるかのように見えて、実際

は人をおかしな方向に誘導していく可能性を秘めているんじゃないか。

さてふたつめには、これも競争を助長する考え方とどこかで関連しているとは思うのだが、若者を中心に一種の「何者か」信仰というような態度が生まれてきていると思う。これは、この社会で成功したり、強い権威や地位を持つようになったりした人たちを過剰に評価し、一方でそういういった人たちに向け批判を加えたり、疑問を提起したりすることを避ける姿勢のことだ。

アーテイストやスポーツ選手、有名人など「何者か」への憧れは、多かれ少なかれ以前からあったものだと思う。しかし最近では、それが競争の中で勝ち残った人、成功した人も向けられ、競争の敗者、弱者までもが、そうした成功者たちには逆らうべきではない、という認識を持つようになってきている。

同年代と話すと、この社会っておかしいよね、というところまでは話を通しても、そこから先になると「でも総理は頑張ってるよね」とか「有名なインフルエンサーの助言に従ってスキルを身につけよう」、みたいな話に収束してしまう。また、若いときから自分が何者であるかを何らかの肩書きによって示そうとする態度も広がっている。

こういういった姿勢には、「生き残れ」が持つ問題と同じく、人が競争の勝者である「何者

か」を一種のロールモデルとして内面化し、そうなれない場合自分を否定したり、またそうなれない他者を劣った人物と捉えたりし、結果として社会の中で権威や地位に従う風潮を強めるのではないか、という問題があると感ずる。

朝日新聞の記者である玉川透たまがわの編著『強権に「いいね！」を押す若者たち』（ヤシヤ・モック、ロベルト・ステファン・フォア著、濱田江里子訳、青灯社、2020年）では、大学生をはじめとする日本の若者の中に、総理大臣を批判するのはよくないと考える姿勢が生まれてきていることが指摘されている。この本は、朝日新聞『GLOBE』での連載をもとに、玉川が若者やさまざまな分野の研究者を取材し書いた文章と、アメリカの政治学者による寄稿からなっており、世界中で進行している民主制への疑問の高まりを考察している。日本の若者にそのような姿勢が出てきていることの理由として、玉川は取材した研究者の推測も踏まえつつ、学生たちには「民主主義」がいわば「多数で決めたことには従う」という内容として理解されている上、そういったシステム自体が神格化され、その中で選ばれたということが「カリスマ」のよりどころになっている、と書いている。

また、社会学者の伊藤昌亮いとうあきらによる「ひろゆき論」（『世界』2023年3月号、岩波書店）で

は、なぜ社会的に弱い立場にいる人々が、沖縄の市民運動を揶揄する言動で物議をかもし、また新自由主義という「弱肉強食」の論理を持つインフルエンサー・ひろゆき（西村博之）の主張を支持してしまうのかを、ひろゆきの著作を読み解き分析している。伊藤によれば、ひろゆきの主張は一種の「プログラミング思考」の提案であり、ひきこもりやコミュ障といったひろゆきが想定する弱者「ダメな人」たちに向けられている。その内容は日本社会が終わっていても、個人は自己改造すれば生き残れる、と呼びかける内容だという。伊藤は、ひろゆきの考えは、「ダメな人」たちにとって「社会への憤懣」と「自己への承認」を同時に満たしてくれる主張であり、「弱肉強食の論理」である新自由主義を弱者に向けて「優しく」転倒させたものであると読み解き、その危うさについて警鐘を鳴らす。

ぼくが東京で暮らし、見聞きしてきたのも、玉川や伊藤が言及している状況とおおよそ重なるものだったとを感じる。同年代の「生き残れ」と「何者か」というふたつの考え方に接する中で感じたのは、そういった考えは、人に「スキルを身につけろ」と迫ったり、中身の無いロールモデルを押しつけたりしてくる点で、いわば個人に対して「あとづけ」の技能や目標を強要する考え方であり、根本的なところでは人が元々持っている、その人なりの存在意義や権利といったものをないがしろにする考え方なんじゃないかということだ

った。

そしてぼくは、その人の中に元々ある部分、個人が生きる上でつねに自分の出発点とする要素の方が重要だと考えるようになった。それが普段の自分の生活感覚や嗜好といった、「なんでもない人」としての自分というアイデアである。

スペイン滞在から見えたこと

こういうことをはっきりと考えるようになったきっかけのひとつに、2018年から2019年の1年間、ヨーロッパのスペインで生活するという経験があった。

スペインへ行ったのは、元々スペインの料理や映画が好きで、国そのものに興味があったからということはあるが、最大の理由は、いまの日本の状況に嫌気が差し、逃げ出したという気持ちが高まっていたからだだった。現地で何かがしたいというよりは、日本と一定期間距離を置く、という以上の目的はなかった。

「留学」中にあえてこれをやろうと思っていたことは、とくに何もなかった。滞在した地方都市では勉強も友人作りも、アルバイトも、移住の模索も、どれもやりたければやるし、気が進まなければやらない、というペースで過ごした。語学学校自体は楽しく通っていた

が、住んでいた学生アパートで一日中YouTubeを見るもよし、好きな料理に明け暮れるもよし、という考え方だった。いわば「何もしない」留学をしたのである。

実際に足を運んでみると、スペインという国にもいろいろな問題があるようだった。2008年のリーマンショックから続く深刻な経済不況、若者の海外流出、過疎化、性差別や極右勢力の台頭、気候変動や難民への対応など。ほく個人からしても非常に「穴」が見えやすい社会で、こんなに「デコボコ」した場所だったのか、と思った。けれど、出会った現地の幾人かの人たちからは、そんな問題山積みの自国の状況に呆れ、辟易しながらも、問題は問題なのだから、どういう形にしる解決しなければならぬ、と社会の状況をしつかり見定めようとする視線も感じられた。

バル（居酒屋）に入れば、店員と客のやり取りは、日本の飲食業界に比べればはるかに対等に近いものであったし、デモやストライキは日常茶飯事で、人々は休日もしっかりと休む。ヨーロッパの「進んだ」文明の一国としてではなく、「穴」もそれなりにある、世界のはしっこの一國としてのスペインという場所から、もう片側のはしっこにある日本という生まれ故郷を振り返る経験はいろいろなことを考えさせてくれた。

そのスペイン滞在の末に思ったのは、自分の中にはスペインにいても、日本にいても、

まったく変わらない、自分なりの生活のペースや好みがあるということだった。

ぼくは普段昔ながらの定食屋やラーメン屋へ行くのが好きなのだが、スペインにいるときは、アパートの近くでスペイン人のおばさんがひとりで切り盛りするハンバーガー店によく行った。スペインではじつは個人のハンバーガー店が多く、内陸地方の乾いたパンズに、赤身の肉を中心にしたシンプルなパテと新鮮な野菜がはさまれたハンバーガーをほおばりながら、おばさんと世間話をする。そのときふと、こんなことが前にもあったな、と思っただが、そこで思い出したのは、東京の地元でよく行っていた中華定食屋のことだった。その中華定食屋でもぼくは、初老のご主人とよく世間話をしていた。まったく違う国にきているのに、同じようなタイプの店を見つけ出し、同じように店主と話をしている。大陸の反対側までやってきて、日々やっていることは何も変わらないのである。考えてみれば、現地で付き合い合った数少ないスペイン人や中国人、韓国人の友人らも、日本の友人たちと似たようなタイプの人たちだった。

そういった自覚を通して思ったのは、自分の中にはどんなことがあっても、そう簡単には変わらない部分があるということだった。自分が何かを習得するとか、何らかの成果を出すとか、何かの地位につくとか、そういった後から自分に張りついてくる「何者か」と

しての自分とは違う、元から自分の中にしみついている、「なんでもない」自分。

スペインから帰国し、あらためて、自分が嫌になったいまの日本のさまざま側面について、この「なんでもない」というところから向き合ってみたいと思うようになったのである。

「おりる」思想

「なんでもない」人の視点からいまの社会を見つめ直したとき、何が見えてくるのか。

この本の内容を先取りして言うと、そこには「おりる」という新しい考え方、生き方が見えてくるのである。

「おりる」とは、社会が提示してくるルールや人生のモデルから身をおろし、自分なりのペースや嗜好を大事にして生きる、という考え方だ。

なんだ、個性尊重みたいな単純な話か、と思うかもしれないが、そう簡単なものではない。この社会で「普通」に生きようとする個人にふりかかってくる、さまざまな重圧や誘導とうまく距離を取り、時にはそれらを強くはねのけ、どう自分なりに無理なく生きていくか、微妙なバランス感覚が必要になってくる。

ほくは大学の終わり頃、評論家の加藤典洋のりひろさんのゼミ、勉強会に参加するようになり、映画や小説について書くことを通して社会についても考える、という方法があることを知った。加藤さんとゼミ生、聴講生の方たちと共に、本を読み、文章を書くということを数年間経験したのである。また、そうして文章を書き始めながら、もう一方では、いまの日本の「生き残り」や「何者か」といった発想以外で生きる道はないのか、と疑問を持ち、日本各地で面白いこと、変わったことをやろうとしている人たちの情報を集め、時にそのうちの何人か、本書でも書いた伊藤洋志ひろしさんや勝山実みのるさんに会いに行ったりもした。

そうして映画を見たり、本を読んだり、人と出会ったりする中で思ったのは、いま世の中の端々に、日本で支配的な考え方とは別の仕方、したたかに、それでいて力強く生き抜いている人たちがいる、ということだった。

この本では、そんなほくがこの10年ほどの間に見聞きしてきた映画や本、小説を通して考えた、「なんでもない」人という視点の先にある、「おりる」思想について考えていきたい。

ここで、この本の構成についてふれておこう。

全体は2部構成になっており、第1部では第1章から第3章まででそれぞれ別々の映画や本を取り上げ、「おりる」思想とそれに関連するテーマについて考察していく。

第1章は、近年続けて制作されたふたつのクマのキャラクターが登場する映画『パディントン』（これまで2014年と2017年にシリーズ2作が作られた）と『プーと大人になった僕』（2018年）を取り上げた。それらの作品から見えてくるクマのキャラクターの新しい主体性と「成長」「何者か」といったものへの問題提起が描かれていることに注目している。

第2章は、日本の映画監督・深作欣二ふかざくきんじが2000年に制作した『バトル・ロワイアル』を取り上げ、若者同士の殺し合いを描いた同作を20年経たたいまの視点から振り返った。深作を「生き残り」というテーマを描いてきた監督として捉え直し、『仁義なき戦い』をはじめとした往年の作品も参照しながら、その内容がいま頻繁に描かれる『バトル・ロワイアル』風の映画や漫画などどう違うのかを考えている。

第3章は、2010年代に発表された日本のいく人かの書き手の本や漫画を取り上げ、いまの日本の水面下であらわれてきている「おりる」思想について考察した。その中で、これが従来の「生き残り」という発想とどこが違うのかも明らかにしている。

続く第2部は、戦後最年少で直木賞を受賞し、『桐島、部活やめるってよ』（集英社、2010年）や『何者』（新潮社、2012年）で知られる小説家・朝井リョウの作品を網羅する形で取り上げ、その作品群の中で描かれる「おりられなさ」という要素に着目した。朝井作品では第1部でふれた「おりる」思想に重なる描写が見られる一方で、登場人物たちが独特な「おりられなさ」に直面する姿が描かれている。ほくの見立てでは、そうした登場人物たちは最終的には自分の中にある「好き」という感覚を経由して「おりる」ところまでたどり着くのだが、この第2部では朝井作品の「おりられなさ」について考察することで、「おりる」ということの一步手前で考えなければならぬ問題があることを見えてきたい。